

フランス王政復古期の歴史図像 ——ルイ18世のパリ入城とアンリ4世騎馬像

安室可奈子

Ⅰ. 問題の所在—復古王政の政治宣伝^{プロパガンダ}

フランソワ・ジェラルール作《パリに入城するアンリ4世》(1817年のサロン、ヴェルサイユ宮国立美術館) [図1] は、フランス王政復古期にルイ18世政府から注文を受け描かれた大型の歴史画である。1594年3月22日、宗教戦争の対立の中でユグノーであったアンリ4世が自らカトリックへと改宗し、パリに平和的に入城する瞬間を描いている¹。カウフマンはこの作品注文の背景には、ルイ18世と復古王政の政治宣伝の意図があることを指摘した²。彼らはブルボン王朝の始祖であり、歴史的にも市民から人気のあったアンリ4世を主題として取り上げ、王位継承性を強調することで政権の安定を図ろうとしたのである。このカウフマンの見解を受けて、筆者は先の拙論で作品をめぐる初期批評を纏めその受容について述べた³。

その研究の過程で、今度は注文主のルイ18世自身が1814年の王政復古でパリに入城する様子が表された図像が少なからず見つかった。それらはアングルや視距離を様々に変えながら、ポン・ヌフ橋(以下、ポン・ヌフと記)上を馬車で通過するルイ18世を描いている。また、そこには常にアンリ4世騎馬像が描きこまれている。こうした図像はいずれもこの出来事とほぼ同じタイミングで制作、発表された水彩画や版画で、王政復古期にアンリ4世とルイ18世が意識的に関連づけられていたことを傍証する史料と言える⁴。本論考はこれらを紹介し、また当時の人々のアンリ4世騎馬像をめぐる言説を紐解くことで、ジェラルール作品の成立を促した歴史背景を明らかにしたい。

Ⅱ. 描かれたルイ18世のパリ入城パレード

①メランの水彩画

後景にセーヌ川を臨んだ、ポン・ヌフの上。前景にフリーズ状に描かれた多数の群衆が見守る中、ルイ18世が八頭立ての馬車に乗って通り過ぎようとしている。その向こう側からパレードの隊列を見下ろすように、アンリ4世騎馬像が描かれている。騎馬像の右側には1783年にモンゴルフィエ兄弟によって発明されてまもない気球が飛行している⁵。現在、ヴェルサイユ宮国立美術館に所蔵されているメランの水彩画である [図2, 図3]。

1814年4月24日、ナポレオンの皇帝退位に伴いルイ18世はおよそ四半世紀ぶりに王政を復活させた。5月3日、王は隊列を組んでパリに入城する。ナポレオンの秘書官を長く勤め、王政復古

期にはルイ18世側についてブーリエヌは全10巻に渡る回想録の最終巻において、当時の状況を次のように語っている⁶。「そして翌日5月3日、ルイ18世はパリに厳かに入城した。アングレーム侯爵夫人⁷と共に馬車でまずノートルダムに赴き、ボン・ヌフに到着すると、王は再建されたアンリ4世の彫像の模型を見出した。彫像の台座には次のような銘文が刻まれていた：ルイが帰って、アンリが甦った (Ludovico reduce, Henricus redivivus)⁸」(下線は筆者による)。ルイ18世がボン・ヌフ上で、ブルボン朝の始祖であるアンリ4世の騎馬像前を通過する。メランが描いたのはまさにその瞬間だった⁹。

メラン作品の大きさは高さ61センチ×幅95センチで、水彩画としては大型である。おそらくほぼ同時期に描いたと思われる別の二点の水彩画についてはサロンへの出品は確認できていないが、やはりルイ18世のパリ入城の様子を描いており、ほぼ同じサイズである。一点はボン・ヌフを通過する情景をセヌ左岸側から捉えたもので、画面左手にアンリ4世の騎馬像を臨みパレードとそれを見つめる群衆が広角で捉えられている〔図4〕。もう一点はチュイルリー宮殿に到着したルイ18世を群衆が参賀している様子を描いたものである¹⁰。

これらの水彩画を描いた画家メランの活動記録に関する資料は多くない。ベネジットによれば、メランは1763年にカールスルーエで生まれ、ストラスブールで絵の修業をした。街景を得意とし、最初は皇妃ジョセフィーヌの、後にルイ18世付きの画家として仕えた。1804年から24年にかけてサロンへの出品が確認されている。1831年にパリで没した¹¹。作品の来歴については1814年のサロンで展示され、オルレアン公ルイ＝フィリップの所蔵を経て、1855年までにはヴェルサイユ宮に収蔵登録された¹²。

本作品について目下唯一確認できる先行研究は、ルーアン国立美術館で開催された「隠された至宝：ヴェルサイユ宮国立美術館・グラフィック・アートコレクションの傑作」展図録における作品解説である¹³。それによればメランは、彫刻家の父クリストフと叔父ジョセフが共にカールスルーエのバーデン辺境伯の宮廷で活動していたことから、同地で誕生した¹⁴。メランは18世紀末に数多く活動していた旅行芸術家 (artiste voyageur) のひとりに数えられる。とりわけ1784年以降コンスタンティノーブルの宮廷画家として活躍し、パリに帰国した1803年には版画集『コンスタンティノーブルとボスポラス海峡の絵画旅行』を刊行する¹⁵。ジョセフィーヌ皇妃は彼の街景画を高く評価し、庇護者となった。

そうした画歴の後、メランはサロンに《ルイ18世のパリ入城 ボン・ヌフ上を通過する瞬間 1814年5月3日》を出品し表彰された¹⁶。この水彩画は王の側近のある貴族から助言を受けて複製版画化されたという¹⁷。1815年2月14日付の復古王政の広報誌『モニトゥール・ユニヴェルセル』では、メランがこの作品をルイ18世に自ら紹介した事実が確認できる。そこでは「メラン氏は国王に二点の絵画をお見せする光栄に浴した。一点はルイ18世のパリ入城、もう一点はシャン・ド・マルスにおける親衛隊旗の配布を描いたものである。国王は作者に褒賞を与え、作品における仕上げの正確さに賛辞を送って下さった」とある。作品はこの機会に、王室のコレクションとなったと推定されている¹⁸。

ところで先述のブーリエヌはルイ18世が「アンリ4世の彫像の模型」を見たと言った。同様に建築家フォンテーヌも日記においてルイ18世のパリ入城について触れ、次のように述べている。「本日、国王はパリに入城された。まずノートルダム大聖堂に赴かれ、テ・デウムに参列して幸

運な帰還に際し神から受けた恩寵に感謝の祈りを捧げた。そこからチュイルリー宮殿に向かい、レシュル通りに面した大前庭の入口である小拱廊の前を通過された。ポン・ヌフ上で国王は、アンリ4世彫像の新しい石膏模型を見出された。その彫像は、革命前までそれがあった場所に再建しようと人々が計画しているものである¹⁹（下線は筆者による）。プーリエヌとフォンテーヌのこれらの証言から、我々はメランの作品に描かれている彫像が白一色で彩色されている意味に気づく。すなわちこの絵の中に描かれているアンリ4世騎馬像は、17世紀に最初に建てられたものとも、また現在我々がポン・ヌフ上で目にするものとも異なるものなのである。

②歴史版画におけるルイ18世のバリ入城

フランス国立図書館版画室所蔵のヴァンク・コレクションは1770年から1870年までの一世紀間の膨大な歴史版画コレクションである。その所蔵目録第5巻第1章には「ブルボン家の帰還 1814年4～5月」として152点の版画がリストアップされている。そして「ルイ18世のバリ入城」の場面も十数点の版画の存在が確認でき、この出来事が同時代に複数の版画媒体によって記録、流布されたことがわかる²⁰。

例えば、図5はメランの視点をクローズアップした画面構成で、パレードの様子がより詳しく表現されている²¹。この版画は作者不明であるが、銘文には「フランス国王・ナバラ国王陛下ルイ18世のバリ入城、1814年5月4日」とある（実際にはパレードは5月3日に行われたので、銘文の日付は間違っている）。発行したのはジャンという印刷業者で現在の5区に位置するサン＝ジャン・ド・ボーヴェ通り10番地に事業所があった²²。

1814年5月1日付『ジュルナル・ド・パリ』は「昨日、ポン・ヌフの床台地にアンリ4世の彫像を設置し始めた。現在建設中の古代様式の二つの神殿（プロピュライア）はまもなく完成する。第一の神殿のフリーズには『フランスの和合』、第二には『国家の和平』と金字で刻まれているのが読める」と記事の中で述べた。また同紙5月4日付は「（ノートル・ダムで歌われた）テ・デウムの後、隊列はアンリ4世の彫像前で止まった。台座にはラテン語で『ルイが帰って、アンリが甦った』と読み取れた。コンセルヴァトワールの音楽家たちがプロピュライアの中で楽曲を演奏している。中でもフランスにとって大変重要な歌曲が選ばれていた。白い身なりをした若い娘たちがアングレーム大公夫人に花々を差し出している。同時にフランスの紋章をつけ旗で飾られた気球が天空に上がった。操縦していたのはブランシャール夫人である。』²³と報じている。

この記述からは当時のパレードの様子が生々しく伝わってくる。実際に画面前景の群衆は腕を挙げたり身を乗り出したりして、国王の帰還を喜んでいる。中景では8頭の盛装した馬たちに牽かれた馬車に乗ったルイ18世が、人々の方を見て声援に応えているのがわかる。背景にはアンリ4世の騎馬像が見え、画面中央に大きく気球が描かれている。気球はブルボン家の紋章である3つのフルール・ド・リスで装飾され、これが旗印としても復活したことを示している。気球に乗る女性はやはり両手にこの旗を掲げており、パレードの隊列や群衆の中にもこうした旗を振る者が散見される。気球に乗っているブランシャール夫人は冒険家である亡き夫ジャン＝ピエールの意志を継ぎ、気球による見世物飛行を続けた女性であった²⁴。当時パリ市民に大変人気を博していたブランシャール夫人の登場が、多くの市民の注目を集めたことは想像に難くない。

また同じ業者から刊行された図6は、馬車で走行するルイ18世をクローズアップした構図であ

る²⁵。銘文は図5と全く同じものが用いられている。背景のアンリ4世騎馬像と気球は小さく描かれている。いささか奇妙なのは、図5も図6もボン・ヌフを通過してチュイルリー宮殿に向かっているはずなのに、後者では馬車の進行方向が逆だということである。つまりこの図6は現実的には左岸の方に戻っていることになる。こうした地誌的考証の不正確さはあるものの、アンリ4世騎馬像が見守る中を馬車で通るルイ18世に焦点をあてた版画は、王政復古のプロパガンダに大きな効果をもたらしたに違いない。

作者不詳の作品が多いこれらの歴史版画にあって、図7は作者が判明している貴重な作例である²⁶。「ルイ18世のパリへの入城」と銘文があるこの版画は、クールヴォワジェの下絵に基づくデュボワの版刻による²⁷。ノートルダム方面からルイ18世の乗った馬車がボン・ヌフに入る瞬間を捉えており、前景にはそれを見守る群衆、左手にはアンリ4世騎馬像と気球が配置されている。下部の銘文と同じものが上部に反転して記されているのがわかるだろうか。この銅版画は *vue d'optique*²⁸と呼ばれる眼鏡絵に加工された。サン・ジャック通り64番地に店を構えていたバセという業者が「パリ風景」というシリーズで1814年から30年までこの眼鏡絵を刊行したという²⁹。こうした事実は、民衆の娯楽においてもルイ18世のパリ入城のエピソードが流布されていたことを物語っている。

図8も同じく眼鏡用に加工された作者不詳の銅版画で、サン・ジャック通り10番地に住所のあったシェロー未亡人が刊行している³⁰。こちらはボン・ヌフが舞台ではなく、ルイ18世を乗せた馬車は聖職者たちに見守られながらノートルダムの正面広場を行進している。以上の4点はいずれも彩色銅版画として、色鮮やかにルイ18世のパリ入城の様子を伝えている。そのうちの3点がボン・ヌフ上のアンリ4世騎馬像前を通過する瞬間を描いており、アンリ4世から続くブルボン王朝の継承性を意識的に関連づけている。

彩色のみならず白黒の銅版画でもこのパレードの様子は広く公衆の知るところになった。たとえば図9は図7と同じ印刷業者バセによって発行されたものである³¹。銘文には「ルイ18世国王陛下の行列がアンリ4世騎馬像の前を通過する風景 1814年5月3日、国王のパリ到着日」とある。

図10はムフタール通り89番地住のル・クール³²によって版刻された点刻版画である³³。主な銘文は「ルイ18世国王陛下のパリ入城 1814年5月3日」で、シテ島からボン・ヌフに続く道の手前でこの行列風景を捉えた構図となっている。版画家自身の他ジャンティ (Genty)、バンス (Bance) という版画家、印刷業者と共同でこの版画を発行している。

また図11は4.5×7.8cmという小型の記銘前の版画で、『気球の歴史集成』という版画集の一部であった³⁴。作者はクシェで、1782年パリ生まれの版画家である³⁵。『気球の歴史集成』からは他にもヴィネット (書物のための小型装飾版画) が多数確認できる³⁶。

以上のように、ルイ18世のパリ入城では、アンリ4世騎馬像の前を通る場面がいわば決定的瞬間であり、多くの歴史版画によってその様子が伝えられたと言えよう。また前述のメランも水彩画の制作の際に、これらの版画を参照した可能性は十分に考えられる。

III. 幻のアンリ 4 世騎馬像 (1814年)

前章で述べたようにボン・ヌフ上のアンリ 4 世騎馬像はルイ 18 世のパリ入城の主題に常に描きこまれている。この騎馬像がボン・ヌフ上で辿った歴史について簡単に述べておきたい。

ボン・ヌフ橋は1577年、アンリ 3 世の命によって建設が開始された。続くアンリ 4 世もこの事業を受け継ぎ1607年に橋は完成する。パリで一番古い「新橋」の誕生である。アンリ 4 世の死後、マリー・ド・メディシスは彫刻家ジャン・ド・ボローニュにアンリ 4 世騎馬像の制作を依頼した。騎馬像は1614年 8 月、シテ島の床台地 (terre-plein) に設置された。フランス革命後の1792年、大砲を作るため騎馬像はその台座とともに溶解され、約20年に渡りボン・ヌフ上にアンリ 4 世騎馬像は不在となる。その後1818年にルモによって新しい騎馬像が作られ設置された³⁷。これが現在も我々がボン・ヌフで目にする彫像である。

ルイ 18 世のパリ入城は1814年に行われたので、旧騎馬像から新騎馬像へ移行するまでの空白期間に当たる。ところが先に紹介したメランの水彩画や歴史版画にはしっかりとこのアンリ 4 世騎馬像が描かれている。ここでブーリエンヌや建築家フォンテーヌがこの騎馬像を「アンリ 4 世の彫像の模型」、「アンリ 4 世彫像の新しい石膏模型」と呼んだことをもう一度思い出してみたい。すなわちこれは暫定的に制作された騎馬像だったのである。そのような視点であらためてルイ 18 世のバリ入城を主題とした図像をみると、メランや版画のアンリ 4 世騎馬像はみな白一色で彩色されている。しかしながら王政が復活する直前までパリはナポレオン帝政下にあった。だとすればどのような経緯で、石膏模型とはいえどもアンリ 4 世騎馬像がボン・ヌフに再び出現することになったのだろうか。その過程をたどっていくと、王政復古のシンボルとしてのアンリ 4 世像復活にかける、当時の人々の驚くべき奮闘が明らかになってくる。

パリ公共建築物保存官のラフォリは1819年、『アンリ 4 世騎馬像の鑄造と建設に関する歴史的回想』を刊行した³⁸。これは1818年に新しく設置されたアンリ 4 世騎馬像を指揮、監督する立場にあった作者が、その一部始終について詳細に述べたものである。巻末の補遺には数多くの同時代史料が掲載されており、その意味でも大変貴重な文献といえる。ラフォリはこの本の中で、王政復古期の状況とルイ 18 世のバリ入城、そして暫定的にボン・ヌフに設置されたアンリ 4 世騎馬像について記している。

1814年 3 月 31 日、ナポレオンを包囲していた対仏大同盟軍によって首都パリが陥落した。ラフォリは 4 月 1 日、パリ市参事会が声明を出し王室のパリへの帰還を可決したことに触れ、次いでシャトーブリアンの言葉を紹介している。「同時に、ひとりの雄弁な文筆家が祖国に重くのしかかった不幸と、王政の下でフランスが享受する幸福について真実味をもって語った。彼は魂の奥底にあった権力の概念を呼び覚ましてくれた。その概念とは秩序や平和、法律と王政下で守られる自由に結びつくものなのだ。パリ市参事会の願いは全フランス人の心情によって承認されている。」³⁹。

ラフォリは国王らが首都において歓声と熱狂で迎えられたと述べ、「彼らのパリへの到着はアンリ 4 世のバリ入城とある意味で一致していた」と指摘した。すなわち「ルイ 18 世はアンリ 4 世のごとくあらゆる憎悪を鎮め、あらゆる利害のバランスをとり、またあらゆる過ちを赦し忘れるために戻ってきたのだ」⁴⁰ としている。この言説は王政復古を望む人々が、宗教戦争を終結に導

いたアンリ 4 世のバリ入城とナポレオン戦争後のフランスに戻ってきたルイ 18 世の帰還を同一視していたことを物語っている⁴¹。

ボン・ヌフ上にアンリ 4 世の騎馬像を再び設置したいという要望は、ルイ 18 世のバリ帰還前から当時の新聞等で多数掲載されたという。パリ市参事会の議事録によれば、すでに 1814 年 4 月 18 日には王国総司令官に対してアンリ 4 世騎馬像の再建願が出されていた。それを受けて同月 23 日には騎馬像の再建が正式承認され、その費用は国内からの寄付で賄うことが決定された⁴²。

ブロンズによる騎馬像の鑄造には数年を必要とするにも関わらず、ルイ 18 世の帰還の日は 5 月 3 日に迫っている。人々は王がボン・ヌフ上に到着した時、たとえ石膏模型であってもアンリ 4 世の像を再び目にすれば感動するだろうと考えた。制作期間は約二週間しかない。およそ実現不可能に思われたその突貫工事の制作を引き受けたのがロギエという彫刻家だった⁴³。ロギエは即座にジャン・ド・ポローニュ作の旧騎馬像の版画と、アンリ 4 世に生き写しのブロンズ胸像を手に入れた。そして小型の馬のエコルシェ（標本模型）から雛形を作り、壁に拡大設計図をトレースする。それをもとに金具製造業者に鉄製の骨組みを作らせた。これらの手筈をロギエはたった 4 日間でやり遂げた。一方、1806 年にナポレオンがブランデンブルク門から持ち帰ったクアドリガ（四頭立二輪戦車）は、当時プロイセン軍の手でベルリンへの帰途につこうとしていた。ロギエはそのうちの一頭の馬の型取りを 3 日間で行った。残された時間で彼はウードンの助言を受け、たくさんの職人たちの助けを得て、この即興制作に従事した⁴⁴。

そうした努力が実り、ルイ 18 世がパリに入城する前日の 5 月 2 日にはアンリ 4 世暫定騎馬像が設置された。正確には 2 日夜から 3 日にかけて不完全な部分を仕上げていたので、足場が外されたのは 3 日の正午であった。台座には次の二つの銘文が刻まれた。「ブルボン家が現れた時、あらゆるものは滅び果てていた」、「ルイが帰って、アンリが甦った」と⁴⁵。

この暫定騎馬像は現存の有無が確認できず、ラフォリの著書にも版画は掲載されていない。しかし同年ポケ⁴⁶によって複製版画化されている⁴⁷ [図 12]。版画には左側面から騎馬像が捉えられ、「アンリ 4 世騎馬像 1814 年 5 月 1 日ボン・ヌフに再設置」と銘文が打たれている。マラケ河岸 9 番地に店を構えるルモワッスネという版画商が刊行している。版画でみるかぎり、二週間足らずのうちに急場しのぎで作った石膏像とはとても思えない。

こうした暫定騎馬像の設置過程からは、王党派の人々の、いかなる手段を行使してもボン・ヌフ上でルイ 18 世とアンリ 4 世騎馬像の対面を実現したいという涙ぐましい努力が伝わってくる。それほどアンリ 4 世はブルボン王政の再出発にとって絶対不可欠の象徴だったと言えよう⁴⁸。そして彼らはルイ 18 世を迎えるまでのごく短い準備期間の中で、その決定的瞬間を画家や版画家たちに記録させ、宣伝することも怠らなかったのである。

IV. 新アンリ 4 世騎馬像の設置 (1818 年)

ルイ 18 世のバリ入城に間に合わせて作られた石膏の騎馬像はあくまで暫定的なものであり、ブロンズの本作が完成次第とって代わられる宿命であった。しかしルイ 18 世は王政復古を祝福する人々の熱意の表れとして、これをしばらくボン・ヌフ上に設置、保存し続けることを望んだ。したがって最終的にそれが撤収されたのは 1817 年 5 月のことであった。ルーヴル美術館のマレショー

室に運ばれたという。

その後も復古王政を支える高官たちの間で、ブロンズ製のアンリ4世騎馬像を作るという情熱が途絶えることはなかった。新騎馬像の作者はルモ⁴⁹に決定し、設立委員会には会長のマルボワ他、カトルメール・ド・カンシー、ペリニオン、デュフルニーらが委員に選ばれた⁵⁰。1816年以降、美術アカデミーの終身幹事となったカトルメール・ド・カンシーが設立メンバーのひとりであった事実は、復古王政によるアンリ4世のイメージ戦略が彫刻家のみならず、当時の画家、版画家たちに周知されていたことを物語っている⁵¹。

1815年3月20日、ナポレオンがエルバ島を脱出しパリに戻るや一時停止を余儀なくされたが、その百日天下が終わった後、設立プロジェクトは再開された⁵²。1817年9月5日には石膏の大型模型が完成し、10月6日に铸造が行われた⁵³。10月28日にはルイ18世がボン・ヌフ上で台座の定礎式を行う⁵⁴。翌1818年8月14日、アンリ4世騎馬像は铸造場所からボン・ヌフへと運搬される。その様子をラフォリは次のように述べている。「8月13日の夜、ルール铸造所の囲いの壁を一部取り壊し、彫像をフォール・デュ・ルール通り⁵⁵の路面に置いた。彫像はフルール・ド・リスの装飾が施された青い布に包み覆われた。翌朝、牛18頭が繋がれた。牛たちは騎馬像を覆っている布と同様の牛衣をまとっていた。御者たちは青の上着にフランス帽、金色のフルール・ド・リスの白色帽章を身に着けていた。出発は午前10時ごろであった。マリニー大通り、シャンゼリゼ大通り、ルイ15世広場、そしてセヌ河岸という道程である。途方もなく多数の群衆が、ルールのアトリエからボン・ヌフまで彫像が通る先々で溢れていた。チュイルリー庭園ととりわけセヌ河岸沿いのテラスはたくさんの野次馬で埋め尽くされていた。パリはたちまちお祭りのようになった。民衆の喜びはかつてないほど高まり、それはけして偽りのものではなかった⁵⁶。

ヴァンク・コレクションには、この時の様子が表された彩色版画がある [図13]⁵⁷。中景、画面左に布にくるまれたアンリ4世騎馬像を、多くの市民が山車のように引いている。数頭の馬の姿も見える。背景にはそれを見守る群衆がずらりと並んでいる。ところでラフォリの記述では「牛」が運搬の役を担っていたはずで、版画に描かれている内容といささか異なっている。これには理由があった。騎馬像が重すぎてなかなか牛たちが順調に引くことができず、夕方6時になってもまだマリニー大通りを通過することができなかつたというのである。そして牛を馬に代えてやっとシャンゼリゼ大通りへと入ることができた⁵⁸。騎馬像の到着は遅れに遅れ、とうとう人々が自らこれを引き始めたという。この様子をラフォリはこう語っている。「人々は木ぞりの梁にロープを結びつけた。工夫たちがそれを握った。まもなく牛たちを解放し、かわりに多数の手が行列の引き綱をつかんだ。記念碑は動き出す。もはや歩くのではなく、飛ぶように進んでいる。半時も経たないうちに、彫像はチュイルリー宮殿の十字路までたどり着いた。『国王万歳！王室万歳！』と数えきれないほど繰り返す叫び声に迎えられて⁵⁹。

数々の困難を乗り越え、新しいアンリ4世騎馬像は無事ボン・ヌフ上に設置された。1814年の石膏模型の複製版画を版刻したポケが、この新しい騎馬像も版画化している⁶⁰ [図14]。とはいえラフォリの記述からは、その非常な重量のために彫像の設置はけして容易な事ではなかつたことがわかる⁶¹。ここにその時の様子を示す作者不詳の水彩画がある [図15]。アンリ4世騎馬像の後姿をセヌ川の方から捉えたもので、彫像を台座に載せるために使用した滑車が描かれている。騎馬像の制作から運搬、設置まで文字通り大工事であったことを裏付ける絵と言えよう。

結論—ジェラルール絵画作品成立の周辺

本論考では「ルイ18世のパリ入城」を主題とした図像とその歴史的背景について、絵画、版画作例と初期資料を紹介しつつ論じた。同時代の言説からは、ナポレオン戦争によって疲弊したパリへの入城を果たしたルイ18世を、やはりパリへ入城し宗教戦争を解決に導いたアンリ4世と意識的に関連づけていたことが明らかとなった。当初アンリ4世騎馬像の石膏模型設置は王室の命というよりは、むしろ王党派の人々による自発的な行為であったと言える。またこの出来事が繰り返し版画化されたことは、購買層である市民の関心の高さを示している。その結果、これらの図像群とその宣伝力は、復古王政をしてアンリ4世の視覚イメージを積極的に利用していくきっかけとなったに違いない。また当時のアカデミー画家たちにとっても、帝政から王政への移行期に「何を描くか」という主題の選択はいわば画家としての生き残りをかけた重要な意味を孕んでいただろう。メランが新たな為政者のパリ到着を描いた背景には、無論復古王政への追従的意義があることを否定できない。

一方、メランがその水彩画を展示した1814年のサロンには、ジェラルールもまたルイ18世の肖像画を出品している〔図16〕。小品ではあるが大盛装に身を包んだ国王が王座に腰かけた記念碑的な全身肖像画である。ランドンによればこれは国王から直接注文を受けたものだという⁶²。この作品の存在はまた、王政が復活した直後から画家がルイ18世に寵愛されていたことを裏付けている。ジェラルールが《アンリ4世のパリ入城》の注文を受けたのは1816年で、翌1817年春に開かれたサロンで展示された。IVで述べたようにこれは新アンリ4世騎馬像の制作プロジェクトが進められていた時期と完全に重なっている。そのアンリ4世がパリへ入城するという主題を描いた大型の絵画が、ルイ18世自身のパリ入城と復古王政を称揚する存在意義を有していたことは明白である。

カウフマンはジェラルール作品を「立憲君主的概念の視覚化」と述べた⁶³。しかしながらなぜそれが「アンリ4世」のパリ入城でなければならなかったのかという主題の選択については、作品の主人公と注文者をブルボン王朝という系譜の中で関連づけるにとどまった。本論考はそこからもう一步踏み込んで、王政復古期におけるアンリ4世リバイバルへの意図的な演出があったことを指摘したいと思う。石膏の騎馬像台座に刻まれた銘文の通り、彫像のみならず絵画においても「ルイが帰って、アンリが甦った」のだと言えるだろう。

[謝辞] 本論考は平成22-24年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号22520110(研究代表者・木村二郎・日本大学教授)及び平成27-29年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号15K02148(研究代表者・安室可奈子)の助成を受け、その研究成果の一部を発表したものである。掲載にあたり、査読いただいた本学の篠田勝英教授、福田耕介教授より貴重な御教示を賜った。また美術史学会東支部例会(2015年11月28日、於：慶応義塾大学)での口頭発表に際しては、慶応義塾大学の遠山公一教授ほか数々の貴重な御意見を賜った。ここに感謝の意を表する。

注

1. アンリ 4 世のパリ入城については、BAYLE (P.), *Dictionnaire historique et critique*, VIII, Genève, Slatkine, 1820-24 (1ère éd. : 1695), pp.52-71 ; GAVARD (C.), *Histoire de France, servant de texte explicatif aux tableaux des Galeries de Versailles*, III, Paris, Gavard, 1840, pp.129-130; LAROUSSE (P.), *Grand dictionnaire universel du XIXe*, IX, Paris, Administration du grand dictionnaire universel, 1866-1878, pp.185-187 ; LALANNE (L.), *Dictionnaire historique de la France*, I, Genève, Slatkine-Magariotis [Rép.: 1977], 1877, pp.981-982;1 を参照。
2. KAUFMANN (R.), "François Gérard's 'Entry of Henry IV into Paris' : The Iconography of Constitutional Monarchy", *The Burlington Magazine*, CXVII, 1975, pp.790-802.
3. 拙論「フランソワ・ジュラルル《パリに入城するアンリ 4 世》(1817年, ヴェルサイユ宮国立美術館蔵) 一作品の受容と先行研究史」(『愛国学園大学人間文化研究紀要』第16号, 2014年 3 月) 1-21頁。
4. すでにジョーンズ (1993) やレード (2006) もアンリ 4 世の画像がルイ 18 世と復古王政の政治宣伝のために繰り返し利用されていたことを述べている : JONES (K.A.) «Henri IV and the Decorative Arts of the Bourbon restoration, 1814-1830», *Studies in the Decorative Arts*, Vol.1, No.1, 1993, pp.2-21 ; WREDE (M.), «Le portrait du roi restauré, ou la fabrication de Louis XVIII», trad. par WEIL, C., *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, T.53°, No.2, 2006, pp.111-138.
5. 気球の歴史については LAROUSSE, *op.cit.*, I, p.109-110; II, p.129; XI, pp.509-510 ; IMBS (P.), *Trésor de la langue française*, IV, Paris, Edition du C.N.R.S, 1975, p.92 ; コットレル (L.), 西山浅次郎訳『気球の歴史』(東京, 大陸書房, 1977年) ; フィエロ (A.), 鹿島茂監訳『パリ歴史辞典』(東京, 白水社, 2000年) 131-133頁を参照。
6. LAROUSSE, *op.cit.*, II, pp.1140-1141.
7. アングレーム侯爵夫人 (Marie-Thérèse de France, 1778-1851) はルイ 16 世とマリー=アントワネットの長女で, フランス革命中は叔父であるルイ 18 世とともにロシアやドイツ, イギリスに亡命していた。夫のアングレーム侯爵はのちにシャルル 10 世となるアルトワ伯の息子であった (IMBERT DE SAINT-AMAND, *La jeunesse de la duchesse d'Angoulême*, Paris, Dentu, 1886)。
8. *Mémoire de M. De Bourrienne, ministre d'état sur Napoléon, le Directoire, Le Consulat, l'Empire et la Restauration*, X, Paris, Ladvocat, 1829, pp.241-242.
9. この祝祭が実際にどのように行われたかについては次の研究に詳しい : WAQUET (F.), *Les fêtes royales sous la Restauration ou l'Ancien Régime retrouvé*, Genève, Droz, 1981, pp.101-109.
10. MELLING, «Le palais des Tuileries», 1814, guache ; mine de plomb ; blanc, 61×95.5cm, Paris, Musée du Louvre département des Arts graphiques (INV36965)。
11. メラン (MELLING, Antoine-Ignace) については BENEZIT (E.), *Dictionnaire critique et documentaire des peintres sculpteurs dessinateurs et graveurs...*, IX, GRUND, 1999, p.465.; VOLLMER, H., *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart*, XXIII & XXXIV, Leipzig, Seeman, 1999, pp.366-367 を参照。
12. BENEZIT, *ibid*, IX, 1999, p.465.
13. ROUEN, Cat.exp. : *Trésors cachés : chefs-d'œuvre du cabinet d'Arts graphiques du château de Versailles*, SALMON, X., Musée de la ville de Rouen, Musées de la ville du Mans, 2001, pp.118-119.
14. ROUEN, *ibid.*, 2001, p.118. またベネジットによればメランの叔父ジョセフは, ヴァンローやブーシェに師事した。1774年以降没するまでストラスブールで絵画学校を創設したり, 市庁舎などの装飾に携わっている。メランはこの叔父の下で絵の修業を積んだ (BENEZIT, E., *ibid*, IX, 1999, p.465.)。
15. MELLING (A.-I.), *Voyage pittoresque de Constantinople et des rives du Bosphore*, Paris, 1803.
16. Salon de 1814 «no 685 Entrée de S.M. Louis XVIII à Paris, au moment de son passage sur le Pont-Neuf» (*Explication des ouvrages de peinture, sculpture, architecture et gravure, des artistes vivans, exposés au Musée Royal des Arts, le 1^{er} Novembre 1814, p.69.*) ただしランドンによるサロン批評ではメランはオランダの街景を描いた 8 点の水彩画を出品したとされ, 当該作品についての言及はない

- (LANDON, C.-P., *Salon de 1814 : Recueil de morceaux choisis parmi les ouvrages exposés au Louvre, le 5 novembre 1814, gravés au trait et accompagnés de l'explication des sujets*, Paris, Bureau des Annales du Musée, 1814, p.111.)
17. 複製版画は Blanchard, Normand Fils, Piringer によって制作された。メランが販売元となり、銘文の入った版は50フランで、記銘前の版は100フランで売られたという。フランス国立図書館の所蔵資料からは、この版画の存在は確認できていない (ROUEN, *ibid.*, 2001, p.118.)
 18. *Le Moniteur universel*, le 14 fév. 1815 (ROUEN, *ibid.*, 2001, p.118)
 19. FONTAINE (P.-F.-L.), *Journal : 1799-1853 / Pierre-François-Léonard Fontaine*, I, Paris, École nationale supérieure des beaux-arts : Institut français d'architecture : Société de l'histoire de l'art français, 1987, p.414.
 20. ROSSET (A.-M.), *Collection de Vinck, Inventaire analytique, V : La Restauration et les Cents jours*, Paris, Bibliothèque Nationale, 1938, pp.3-52.
 21. ROSSET, *ibid.*, p.32 (no.9110).なお no9109はこの版画が彩色される前のものである。印刷・書籍業総局への登録は1814年6月30日。
 22. 19世紀前半期のパリ市内の通り名については、LAZARE (F.), *Dictionnaire administratif et historique des rue de Paris et de ses monuments*, Paris, LAZARE, 1844 を参照。
 23. *Journal de Paris*, le 1 mai 1814 et le 4 mai (ROSSET, *op.cit.*, p.32).
 24. ブランシャール夫人 (BLANCHARD, Sophie 1788-1819) については LAROUSSE, *op.cit.*, II, p.79 およびコットレル, 前掲書, 62-67, 100-107頁を参照。1809年, 気球冒険家の夫に先立たれたブランシャール夫人はその遺志を継いでパリのみならず, ローマやロンドンなどヨーロッパ諸都市に遠征, 飛行した。とりわけ夜間に飛び立ち気球の上で花火を上げ, 沢山の見物人を喜ばせたという。1819年7月, パリでの飛行中に墜落死した。
 25. ROSSET, *ibid.*, p.31 (no.9107).なお no9018は同じ構図で異なる彩色を施したものである。この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年6月30日。
 26. ROSSET, *ibid.*, p.33 (no.9114).この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年12月17日。
 27. デュボワ (DUBOIS) については, ル・ブランの『版画愛好家辞典』で, 「19世紀初頭にパリで活動していたビュランの版画家」という情報しか確認できていない。クールヴォワジエ (COURVOISIER) については単独では項目が立っていないが, ル・ブランはデュボワ《サンクト・ペテルブルクの風景》において共同作業をしていたと述べている (LE BLANC, C., *Manuel de l'amateur d'estampes*, II, Paris, Bouillon, 1856-1888, p.147).
 28. トレゾール仏語辞典では Optique の項目で「18世紀. 拡大レンズを通して彩色版画を見るための箱. 版画は傾斜した鏡によってその像が正立される」とある。続いて副項目として Vue d'optique があげられ「一般的には記念建造物が表された彩色版画のことを指す. この装置で見る目的で作られる。」と説明されている (IMBS, *op.cit.*, XII, p.563).
 29. ROSSET, *op.cit.*, p.19.
 30. ROSSET, *ibid.*, p.33(no.9115).この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年6月15日。
 31. ROSSET, *ibid.*, p.32(no.9111).この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年6月27日。また no.9112 はこの版画を彩色し眼鏡繪用加工したものである。
 32. ル・クール (LE COEUR, Louis, 生没年不詳). については, 先述のル・ブランが短く述べている。彩色のアクアチントを得意とする画家で, 18世紀後半にパリで活動していた (LE BLANC, *op.cit.*, II, Paris, Bouillon, 1856-1888, p.521). なおこの記述によればル・クールも《サンクト・ペテルブルクの風景》の制作に携わっていた。前述のデュボワやクールヴォワジエとも知己であった可能性がある。
 33. ROSSET, *ibid.*, p.32-33 (no.9113). この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年6月17日。
 34. [*Recueil. Histoire des Ballons*], III, [1783-1851] (Bnf.est. : Ib-1-Fol.-Ib-4-Fol). またこの版画集はエコール・デュ・ルーヴルの修士論文として総目録化されている (MONDIN, G., *Inventaire analytique du recueil "Histoire des ballons"*, Bibliothèque nationale, Cabinet des Estampes, Ib-1 à Ib-4, 4vols., Paris,

- 1977).
35. クシェ (COUCHE, François-Louis, 1782-) は、ジェラルド作《オーステルリッツの戦い》を複製版画化した人物でもある (LE BLANC, *op.cit.*, II, Paris, Bouillon, 1856-1888, p.57 ; DUGNAT (G.), *Dictionnaire des graveurs, illustrateurs et affichistes français et étrangers (1673-1950)*, II, Dijon, L'échelle de Jacob, 2001, p.613).
36. Cote: INF-8509423, INF-8509424など。
37. アンリ4世騎馬像の歴史についてはLAROUSSE, *op.cit.*, IX, p.187他, HARGROVEのパリ市内の野外彫刻作品をまとめた総合研究に詳しい (HARGROVE, J., *The Statues of Paris. An Open-Air Pantheon*, New York, Vendome Press, 1989, pp.53-65).
38. LAFOLIE (C.-J.), *Mémoires historiques relatifs à la fonte et à l'élevation de la statue équestre de Henri IV sur le terre-plein du Pont-Neuf à Paris avec des gravures à l'eau-forte représentant l'ancienne et la nouvelle statue*, Paris, Le Normant, 1819.
39. LAFOLIE, *ibid.*, p.89 ; CHATEAUBRIAND (F. A. de), *De Buonaparte, des Bourbons, et de la nécessité de se rallier à nos Princes légitimes, pour le bonheur de la France et celui de l'Europe*, Paris, 1814.
40. LAFOLIE, *op.cit.*, p.90.
41. ルイ18世と王政復古期の歴史については, LAMARTINE (A. de), *Histoire de la Restauration*, 8 vols., Paris, 1851-52 ; LARROUSE, *op.cit.*, X, pp.716-717 ; ミシュレ『フランス史—VI 19世紀 ナポレオンの世紀』立川孝一, 他訳 (東京, 藤原書店), 2011年 (1872-75年), 533-558頁 ; CHARLETY (S.), *La Restauration 1815-1830*, Paris, Hachette, 1921 ; BOYER (F.), «Louis XVIII et la restitution des oeuvres d'art confisquées sous la Révolution et l'Empire», *Bulletin de la société de l'histoire de l'art français*, Année 1965, Paris, F. de Nobèle, pp.201-207 ; TULARD (J.), *Le Consulat et l'Empire 1800-1815*, Paris, Hachette, 1970, pp.363-409 ; SAUVIGNY (G.de B.), *La Restauration 1815-1830*, Paris, Hachette, 1977, pp.425-43 ; TULARD (J.), *Les révolutions de 1789-1851*, Paris, Fayard, pp.271-317 ; NEWMAN (E.L.), *Historical Dictionary of France from the 1815 Restoration to the Second Empire*, I, N.Y., Greenwood Press, 1987, pp.640-645 ; MANSEL (P.), «Louis XVIII», *The Dictionary of Art*, IV, N.Y., Grove, 1996, pp.555-556 ; APRILE (S.), *La Révolution inachevée 1815-1870*, Paris, Belin, pp.3-35 ; GOUJON (B.), *Monarchies postrévolutionnaires 1814-1848*, Paris, Seuil, 2012, pp.15-122を参照。
42. LAFOLIE, *ibid.*, pp.274-276.
43. ロギエ (ROGUIER, Henri Victor, 1758-) はボワゾ (Boizot) の下でパリで彫刻を学んだ。この彫刻家について確認できる資料はベネジットのみである。1780~92年と1806~13年にセーヴル製陶所で活動。1784年, ローマ賞次点。1808~20年, パリのサロンに出品。ベネジットでは代表作は紹介しておらず, 「王室の祝祭や儀式の彫刻家」となったとだけ述べている (BENEZIT, *op.cit.*, XI, 1999, p.839)。
44. LAFOLIE, *ibid.*, pp.91-94.
45. «Tout perissoit enfin lorsque Bourbon parut / Ludovico reduce, Henricus redivivus» (LAFOLIE, *ibid.*, p.94)。
46. ボケ (PAUQUET, Jean Louis Charles 1759-1824) は, 革命前はヴォルテールやルソーの著作のヴィネットを制作, 革命後はイザベイやC.ヴェルネらアカデミー画家らの下絵に基づくナポレオンの主題の複製版画を制作した。ベネジットにはアンリ4世騎馬像の版画についての記述は確認できない (BENEZIT, *op.cit.*, X, p.651 ; DUGNAT, *op.cit.*, IV, p.1946-1947)。
47. ROSSET, *op.cit.*, pp.247-248 (no.9712)。この版画の印刷・書籍業総局への登録は1814年12月21日。
48. ヴァケの研究によれば, 装飾を担当したベランジェは事前に国王の下を訪れ「陛下は (ボン・ヌフで) ご先祖である君主の彫像と再会されることでしょう」と告げている (1981, WAQUET, *op. cit.*, p.91)。
49. ルモ (LEMOT, F.-F., 1772-1827)については REVEREND, A., *Titres, anoblissements et pairies de la Restauration 1814-1830*, IV, Paris, Champion, 1974, p.303 ; BENEZIT, *op.cit.*, VIII, 1999, p.503 ; ANONYME, *The Dictionary of Art*, XIX, p.140を参照。

50. LAFOLIE, *op.cit.*, p.101. ペリニヨン (PERIGNON, Pierre, 1759-1830) はセーヌ県議会議長を務めた人物である (REVEREND, *ibid.*, p.326). デュフルニーについては詳しく分かっていない。
51. カトルメール・ド・カンシー (QUATREMER DE QUINCY, A.C., 1755-1849) は考古学者, 哲学者, 美術評論家で, アカデミーやサロンの美術批評家として大きな影響力をもっていた (*The Dictionary of Art*, XXV, pp.798-799)
52. 騎馬像建設にかかる多額の費用は, すべて市民の寄付によってまかなわれた (*Liste générale par département, et par ordre alphabétique, de MM. les souscripteurs pour le rétablissement de la statue équestre de Henri IV*, [1817 ou 1818]).
53. LAFOLIE, *op.cit.*, p.175.
54. LAFOLIE, *ibid.*, pp.192-200. この定礎式の様子も版画化されている (《アンリ4世騎馬像の台座の礎を築くルイ18世 1817年10月28日》1817年 彩色銅版画 22.9×32.3cm, フランス国立図書館版画素描室, Cote : IFN-6954840).
55. Rue du faubourg du Roule は, 現在の8区テルヌ広場付近のフォーブール・サントノレ通りのあたりにあったらしい。ここから東に進み, 右折してマティニョン通りへ入ると, シャンゼリゼ大通りにぶつかる。シャンゼリゼをさらに東に進み, ルイ15世広場 (現在のコンコルド広場) を経て, チュイルリー宮殿に到着したのだろう。なおシャンゼリゼからルイ15世広場までは緩い下り坂のため, 地形的には運搬は比較的スムーズであったと考えられる。
56. LAFOLIE, *ibid.*, pp.215-217.
57. ROSSET, *op.cit.*, p.248 (no.9714). ヴァンク・コレクションにはアンリ4世騎馬ブロンズ像を取り上げた版画はこれを含めて13点確認できている (nos. 9710-9722). フランス国立図書館にはこれらの版画以外にも, マルティネ下絵によるリトグラフ (1818年, Cote : IFN-6954841), ルクレールによるリトグラフ (1818年, Cote : IFN-6954842), デュプレッシェ=ベルトーによるペン素描 (1818年, Cote : IFN-10303678), 作者不明の彩色銅版画 (1818年, Cote : IFN-8414235) などにおいて, アンリ4世騎馬像の運搬は描かれている。
58. LAFOLIE, *ibid.*, pp.218-219.
59. LAFOLIE, *ibid.*, pp.219-220. その後騎馬像は14日夜中にボン・デ・ザールまで運ばれ, 数日間その場所に一時保管された。6, 70頭の馬によって牽引されボン・ヌフに到着したのは17日のことであった。
60. ROSSET, *op.cit.*, p.249 (no. 9717).
61. LAFOLIE, *ibid.*, pp.221-232. 台座に騎馬像が無事設置されたのはそこからさらに3日後の8月20日であった。
62. LANDON, *op.cit.*, pp.9-10.
63. KAUFMANN, *op.cit.*, p.799.

[図版]



図1 ジェラール《パリに入城するアンリ4世》1817年(サロン) 油彩、画布 510×958cm ベルサイユ宮
国立美術館.

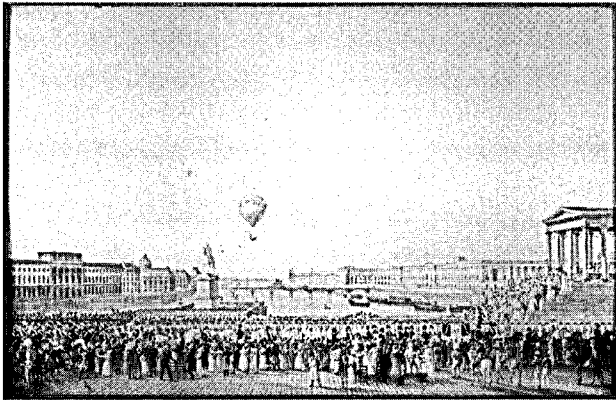


図2 メラン《ルイ18世のパリ入城》
1814年のサロン 61×91cm 水彩
ヴェルサイユ宮国立美術館

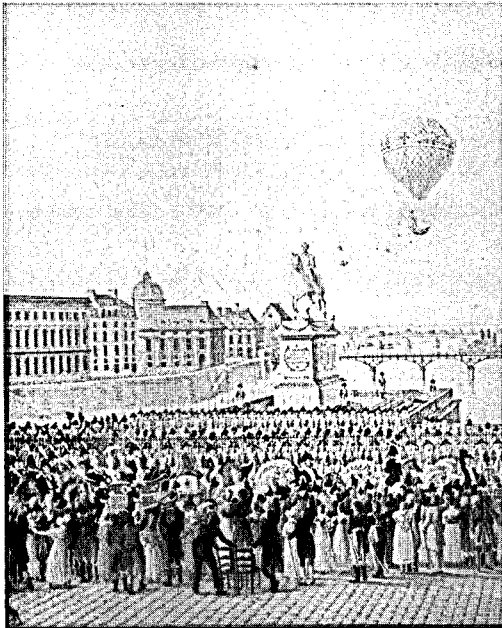


図3 メラン《ルイ18世のパリ入城》(部分)



図4 メラン《ルイ18世のパリ入城：ボン・ヌフの
通過》1814年 素描(チョーク、グワッシュ、
尖筆) 60.5×91.5cm ルーヴル美術館素描室

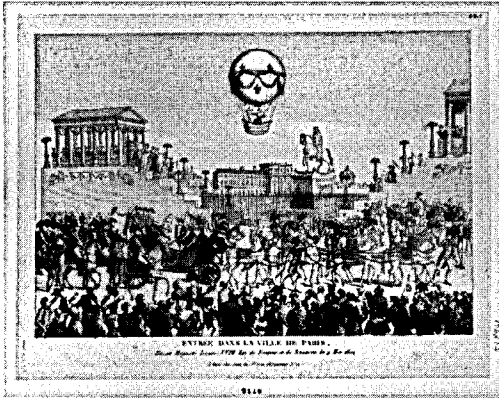


図5 《フランス国王・ナバラ国王陛下ルイ18世のバリ入城、1814年5月4日》彩色銅版画、25.2×35.8cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France



図6 《フランス国王・ナバラ国王陛下ルイ18世のバリ入城、1814年5月4日》彩色銅版画、17.5×32.2cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

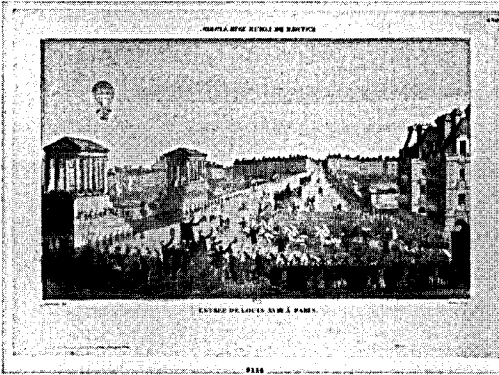


図7 クールヴォワジエ下絵・デュボワ版刻 《ルイ18世のバリ入城》彩色銅版画、24.5×40cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France



図8 《ルイ18世の優れた都市パリへの盛大な入城 1814年5月3日》彩色銅版画、27.5×40.5cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

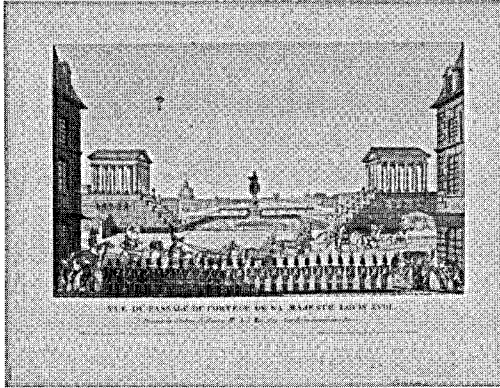


図9 《ルイ18世国王陛下の行列がアンリ4世騎馬像の前を通過する風景 1814年5月3日、国王のパリ到着日》銅版画、25×41.3cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

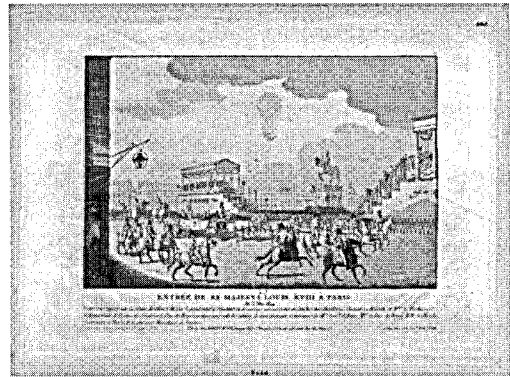


図10 ル・クール版刻《ルイ18世国王陛下のパリ入城 1814年5月3日》銅版画、22.5×34.2cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

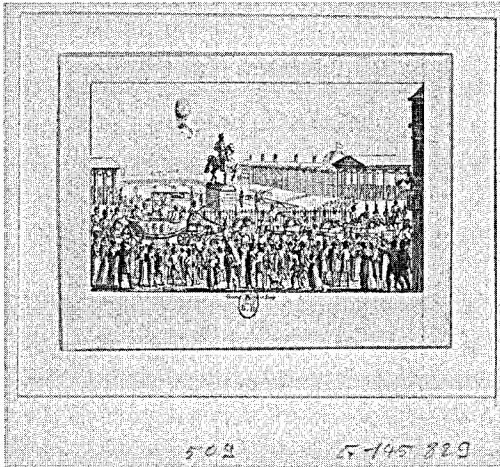


図11 クシェ版刻《ルイ18世の入城 1814年5月3日》1814年 銅版画 4.5×7.8cm、パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

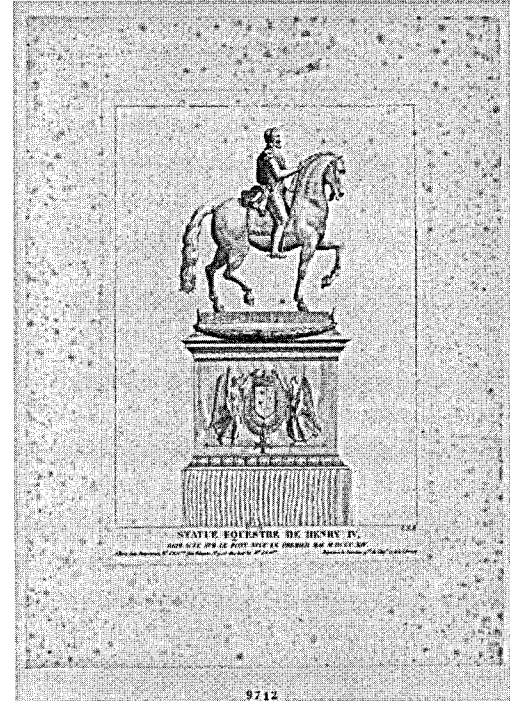


図12 ボケ版刻《アンリ4世騎馬像》1814年 銅版画 21.5×15.6cm パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

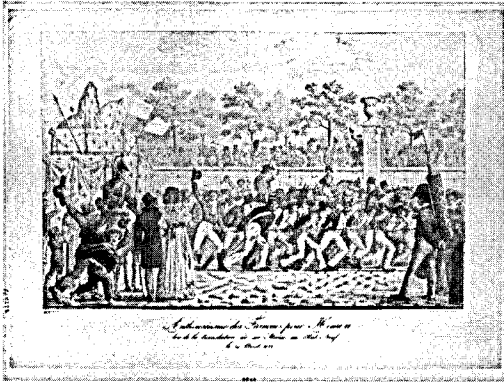


図13 《1818年8月14日、アンリ4世の彫像がポン・ヌフへと運ばれる際の、フランス人たちの歓喜》1818年 彩色銅版画 34.5×51.4cm パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France



図14 ポケ版刻《アンリ4世騎馬像》1818年 銅版画 23×16.1cm パリ、フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France

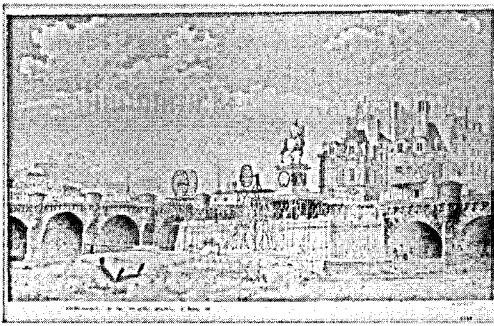


図15 《アンリ4世騎馬像の再建》1818年 ペン、インク、水彩 29.8×50.3cm フランス国立図書館版画素描室。
(C)Bibliothèque nationale de France



図16 ジェラルール《ルイ18世の肖像》1814年のサロン 油彩、画布 32×23cm ヴェルサイユ宮 国立美術館。